

芥川龍之介「毛利先生」論

——サブテキストとの関係から——

曹^{ジョ}

允^ユ

僖^キ

一 残された二つの課題——人物像と構成の問題について

芥川龍之介「毛利先生」は一九一九年一月に「新潮」に発表され、同じ月に短編集『傀儡師^{注1}』にも収められた。「毛利先生」は『傀儡師』に収められている「蜘蛛の糸」や「地獄変」などの他作品に比べて知名度が低く、芥川作品の中でも研究論文が少ない状況が続いている。これまでの「毛利先生」論においては大きく二つのことが問題にされてきた。第一に毛利先生の人物像をどのように捉えるかである。

和辻哲郎は「一体芥川氏は、ある情緒、気分、場面、人間などクツキリと浮き出させ形づけることが実に上手です。（中略）しかし奇妙にこの哀れな人間の哀れさが、舌からは実によく感じられるにもかかわらず、心臓へ迫って来ない」と論じ、宮島新三郎は「笑つていいのか泣いていいのか分からないやうな惨めさ、可憐さが読者の胸に沁^{しみ}々と逼^つて来る」と論じ、中野重治は「一人の中学教師の姿をとおして、人生の辛さ、じめじめした苦しさといったものに読者の眼をひらかせる」と認めながら、「毛利先生」は「彼の数ある短編の中でも特に傑作^{注4}といったものではない」と論じ、吉田精一は「何よりも作者の心が、憐れむべき老主人公の心にちかにふれ合つてゐないことが、

読後に冷たい感触を残す^{注5}」と論じている。これらの論はいずれも芥川の文章力の高さを認めながらも、毛利先生という「哀れな」人物に読者が共感できるかできないかという印象論にとどまつている。

石割透は「当時芥川は数え年二十八歳、この辺に芥川の作風の転機が確かに感じとれるほどに、「毛利先生」には、これまでの作品には見られない哀感が充ちている」とその新しさを認めながらも、「古いものを生き埋めにして止まない」、「十年程以前のこと」「ふた昔」と形容されねばならない、慌^わただしい変化を余儀なくされ続けてきた、近代日本の問題が潜^{ひそ}んでいる」と論じている。確かに、「毛利先生」には若い丹波先生が毛利先生の山高帽を「あの帽子が古物」だと冷やかす場面など、「古いもの」を軽んじる態度が描かれているが、小説の結末部分では毛利先生のことを「健気な人格者」として描いてもいることから、ただ古いものを生き埋めにする「近代日本の問題」ばかりが描かれているとも言えない。

山本芳明は「毛利先生にしてもはや学校で教えることができない事実が示す通り、学歴秩序からの脱落者である」と捉え、「この作品の冒頭部分が暗示しているのは、学歴秩序の、さらに上にあるはずの芸術家の秩序であり、学歴秩序の階級制度と相俟つて、彼らは

その二重の高みから毛利先生の「健気な人格」を評価し、位置づけているという仕組みである。「毛利先生」はその構造からみて差別小説でもある」と論じている。田村修一も「この作品の題名となっている毛利先生は、そんな時代の変化に取り残された前時代の遺物のような教師として描かれている」と石割と同様、近代日本の激しい時代変化と照らし合わせながら論じている。さらに「学校」というものが、そのための選別・差別の装置としての性格をはっきりと現し始めたのが、日清・日露戦争後の日本社会だったのではないだろうか」と学歴社会としての近代日本の学校の問題にも着目し、毛利先生をいわば「古い」時代に取り残された人物の代表として解釈している。しかし、毛利先生は英語の発音の面では「大体正確」で「明瞭」な英語力を持つ「私立中学校の英語の教師」として描かれてもいる。毛利先生が笑われたのはその見た目と滑稽な立ち振る舞いと「殆ど日本人とは思はれない位日本語の数を知っていない」という乏しい日本語力が主な原因とされており、「一年生」たちが毛利先生を見て「皆先を争つて、丁寧に敬礼する」のを見た三年生の「自分」たちが「皆一種の羞恥を感じ」ていることから、すべての生徒に笑われていたわけではないことも読み取れる。毛利先生を単なる「学歴の階級制度」の「脱落者」と見ることには限界がある。

宮園美佳は毛利先生を「伝わることへの希望を失わない言語への信頼、表現を模索し続ける姿勢を見事なまでに貫き通す」人物として肯定的に捉えている。結末部分の毛利先生像を重視していることが宮園論の特質である。確かに、「毛利先生」の結末部に描かれている給仕たちが「苦学生」とも考えられること、また中学生たちや給仕に対する毛利先生の態度やコミュニケーションの取り方に注目し、

それまでの「惨めで哀れな人物像」を「健気な人格者」として再評価していることには説得力がある。ただし「先生の健気な人格を始めて彷彿しえたような心もちがする」傍線引用者。以下同）という表現は本文にあるため、それをなぞるような指摘にとどまっていると言わざるをえない。

このように「毛利先生」の先行研究は「自分」の回想の前半部（中学生時代）に注目して毛利先生を「哀れ」「惨め」「古い」「脱落者」といった消極的な人物として捉えるか、回想の後半部（大学卒業後）に注目し、「健気な人格」といった積極的な人物として捉えるかで評価が分かれている。

「毛利先生」論において問題にされてきた第二のことは、語り手が冒頭部分の「自分」と回想部分の「自分」の二人に分かれていることをどのように解釈するかである。水洞幸夫は冒頭部分が「毛利先生」の物語と緊密に結び合うのか」という問いを提示したが、この問いに対する考察は曖昧なものになっており、十分に追究がなされていない。寫田明子は今まで問題とされてきた「作者芥川の素材に対する態度」よりもこの小説が問題視しているのは、「批評家」という人物設定、ある人物に対する評価の変化という物語内容、それを〈聞く〉人物の存在という点から考えると、テクストが焦点化しているのは、批評という行為についてであると考ええる」としながら「なぜテクスト内で声をあげて批評しないのか」について「毛利先生の物語を批評すべきは、読者自身なのであるということを示すために、結末部が開かれたままになっている」と論じている。水洞論と同じく、冒頭部分と回想部分との関係に注目し、さらに作中における「批評」という行為について考察している点は興味深い、語り手が「生

活のために仕事をせざるを得ない人間に対して無理解であることを暴露している」という解釈は、冒頭部分の「自分」たちの「腰弁生活者」への共感的な描写と齟齬をきたすため、説得力がある論にはなっていない。

このように、先行研究においては「自分」の回想に入る前の冒頭部分とそれに続く回想部分とを十分に関係づけることができていないという課題を残している。本論では「毛利先生」の冒頭部分と「自分」の回想部分、それも回想の後半までを視野に入れた論の構築を試みたい。そのために本論では作中で言及されているサブテキストの役割に注目する。具体的には、冒頭部分で言及される島崎藤村「並木」^(注12)、それに続く回想部分で言及されるデフォー「ロビンソン・クルウソー」^(注13)、ロングフエロオ「サーム・オヴ・ライフ」^(注14)、セルバンテス「ドンキホーテ」などに注目し、それぞれの機能について考察した上で、冒頭部分と回想部分の関係についても考察し、なぜ語り手の「自分」が二人に分かれているかについて検討することによって、新たな「毛利先生」像を浮かび上がらせることが本論のねらいである。

二 「毛利先生」と「並木」

「毛利先生」は大きく三つの時点の出来事によって構成されている。第一に「自分」が毛利先生を回想するにいたるまでを描いた小説の冒頭部分、第二に「自分」が毛利先生に出会った府立三中の三年生の頃のこと、第三に「自分」が毛利先生に再会した大学を卒業した年のこと、である。いわゆる語りの現在に一番近いことになる冒頭部分には、島崎藤村の「並木」が引用されている。

歳晩の或暮方、自分は友人の批評家と二人で、所謂腰弁街道の、裸になつた並樹の柳の下を、神田橋の方へ歩いてゐた。自分たちの左右には、昔、島崎藤村が「もつと頭をあげて歩け」と慷慨した、下級官吏らしい人々が、まだ漂つてゐる黄昏の光の中に、蹣跚たる歩みを運んで行く。期せずして、同じく憂鬱な心もちを、払ひのけようとしても払ひのけれなかつたからであらう。自分たちは外套の肩をすり合わせるやうにして、心もち足を早めながら、大手町の停留場を通りこすまでは、殆ど一言もきかずにあつた。すると友人の批評家が、あすこの赤い柱の下に、電車を待つてゐる人々の寒むさうな姿を一瞥すると、急に身ぶるひを一つして、「毛利先生の事を思ひ出す。」と、独り語のやうに呟いた。

「毛利先生」の冒頭部分は、島崎藤村「並木」のことを思い出す「自分」と毛利先生のことを思い出す「批評家の友人」という二人の語りによって構成されている（このあと「批評家の友人」も「自分」という一人称で毛利先生について語るので、便宜上、これから冒頭部の「自分」を「自分①」、「批評家の友人」を「自分②」と記すこととする）。

松本常彦が指摘する通り、ここに描かれている「腰弁街道」は「大手町一丁目から竹平町（現・千代田区一ツ橋二丁目）への柳並木の濠端沿いの道路」^(注16)のことであり、「腰弁」とは弁当を携えて出勤する安月給取りを表す言葉であった。自分②の回想の中で、中学の同級生の一人が「あの何時も腰に下つてゐる、白い手巾へ包んだものは、毛利先生の御弁当ぢやないんですか」と、文字通り毛利先生が腰に弁当を提げて通勤していたことを語る場面があり、おそらく自分②

は「腰弁街道」という場所やそこを歩いている「腰弁」たちの姿から「毛利先生の事を思ひ出」したものと推測できる。

島崎藤村の「並木」の冒頭部分を見ると、主人公の相川について「彼は長い／＼腰弁生活に飽き疲れて了つた」と語られており、「相川」もまた「腰弁生活者」であつたことが示されている。「昔、島崎藤村が『もつと頭をあげて歩け』と慷慨した」という自分①の言葉は、島崎藤村の「並木」の次のような結末部から引用したものである。

実際、相川の計画して居ることは沢山ある。学校を新に興さうとも思つて居る。新聞をやつて見ようとも思つて居る。出版事業のことも考へて居る。すくなくも社会の為に尽くさうといふ熱い烈しい希望を抱いて居る。しかしながら、彼は一つも手を着けて居なかつた。(中略)日頃『腰弁街道』と名を付けたところへ出ると、方々の官省もひける頃で、風呂敷包を小脇に擁へた連中がぞろ／＼通る。何等の遠い慮もなく、何等の準備もなく、たゞ／＼身の行末を思ひ煩ふやうな有様をして、今にも地に沈むかと疑はれるばかりの不規則な力の無い歩みを運び乍ら、洋服で腕組みをしたり、頭を垂れたり、あるひは薄荷パイプを啣へたりして、熱い砂を踏んで行く人の群れを眺めると、丁度斯の濠端に、同じやうな高さに揃へられて、枝も葉も切り捨てられて、各自の特色を延ばすことも出来ない多くの柳を見るやうな気がする。『あ、並木だ』と相川は腰弁の生涯を胸に浮べた。

『もつと頭を挙げて歩け。』

斯う彼は口の中で言つて見て、塵埃だらけに成つた人々の群を眺め入つた。

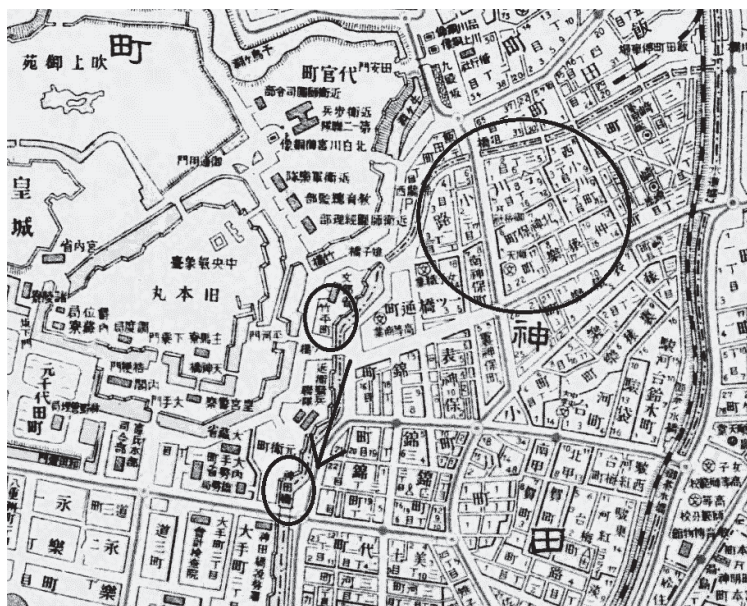
石割透は「並木」は「新時代を前にした中年の不安定な気分を

描く」と論じており、「並木」の原、相川、「毛利先生」の毛利先生のように、時代の中で置き去られる運命にあることを予兆として感じとつていたようである」と毛利先生と相川の状況と心情の一致を指摘した。しかし「並木」の相川は単に新時代に置き去りにされただけの人物ではなく、「社会の為に尽くさう」という熱い烈しい希望を持つているが、「四十近く」なるまで生活のために現実的には何一つ手につけられずにいるという焦燥感を抱えている人物である。「毛利先生」の冒頭部分で自分①は「並木」の相川がいたのと同じ「腰弁街道」を歩いている。そして下級官吏たちを見て「もつと頭を上げて歩け」という言葉を思い出している。

寫田明子は「冒頭に出てくる『腰弁街道』の腰弁とは、まさに生活のために仕事をせざるを得ない人間であつた。冒頭の『自分』によつて引用された『もつと頭をあげて歩け』という言葉は、様々な希望を抱きながら、腰弁生活に浸かつて本當にやりたいことは何もできないと感じている者の言葉である」と論じている。確かに「腰弁」の意味は「生活のために働く」ことの象徴として語られているが、相川は「腰弁生活者」である自分自身と目の前にいる大勢の「腰弁」たちに向けて、「並木」つまり希望を捨ててただ生活するためだけに働く安月給取りになるなど憤慨し、激励を送つてもいた。

この自分①の想起に寄り添うかのように、「腰弁」らしき「人々」を見て毛利先生を思い出すのが自分②（批評家の友人）である。実は、自分②が語る小説の結末部にも「並木」などの言葉が風景描写として配置されており、冒頭部と呼応するような場面設定になっている。

すると大学を卒業した年の秋——と云つても、日が暮れると屢



磯村政富編『新式商業地図 麹町区』
(東京書院、1914(大正3)年、書一部加工)

深い霏が下りる、十二月の初旬近くで、並木の柳の鈴懸などが、とうに黄いろい葉をふるつてゐた、或雨あがりの夜の事である。自分は神田の古本屋を根気よくあさりまはつて、欧州戦争が始

まつてから、めつきり少なくなつた独逸書を一二冊手に入れた挙句、動くともなく動いてゐる晩秋の冷たい夜気を、外套の襟に防ぎながら、ふと中西屋の前を通りかゝると、何故か賑な人声と、温い飲料とが急に恋しくなつたので、そこにあつたカツフエの一つへ、何気なく独りではいつて見た。

この「神田の古本屋」とは現在の千代田区神田神保町のこと、上の地図の右上の場所にあたる。「神田橋の方へ」(冒頭部)と「神田の古本屋」(結末部)という場所の近さ、「並木の柳の下」(冒頭部)と「並木の柳」(結末部)という情景の近さ、そして「歳晚」(冒頭部)と「十二月」(結末部)という時間の近さによって、「毛利先生」には回想部分の結末が小説の冒頭につながるという円環的な光景が作り出されていると言るのである。この円環的な光景も自分②が毛利先生を思い出す契機になっていると考えられる。この円環的な構造の意味については後述する。

三 「毛利先生」と「ロビンソン・クルウソ」

続いて、自分②が中学時代使っていた英語教材である「チョイス・リイダア」の中に掲載されていたものとして引用される「ロビンソン・クルウソ」と「毛利先生」との関係について検討したい。そのために、まず、自分②にとって毛利先生はどのような存在であったのかを外見と立ち振る舞いの観点から考えたい。毛利先生に初めて会った時、自分②は毛利先生の外見について、その「小さい背」を「よく緑日の見世物に出る蜘蛛男」、その「禿げ頭」を「駝鳥の卵」、その「襟飾」を「翼をひろげた蛾」のようであると形容してい

る。毛利先生の外見は、動物のイメージに結びつけて語られており、前田晃が「鑿の痕のかつきりとした彫刻を見るように、かつきりと描き出された毛利先生の淋しい姿の上には、確かにカリカチュア的可笑味もある」と指摘したように、毛利先生の「凡人以上に超越」した「風采」は教室で「笑を堪へる声が、そここゝの隅から起つた」ほど滑稽なものとして戯画化されている。

それに続く場面では、毛利先生について自分②たちに挨拶した後「どこか家畜のような所のある晴々した眼の中にも、絶えず落ち着かない光が去来した」と語られている。これはさらに後の場面では、授業中に毛利先生が生活苦について語って生徒から非難された時にも「家畜のやうな眼の中に、あの何かを哀願するような表情が、際どくちらりと閃いた」として繰り返される。石割透が「毛利先生の眼の形容として、〈家畜のやうな眼〉が度々使われているが、毛利先生こそ、まさに、学校という檻の中に入れられた〈家畜〉のような存在であった」と述べている通り「家畜のやうな眼」という形容が反復されることによって「毛利先生」と「家畜」のイメージが強く結びつけられている。ここで「ロビンソン・クルウソー」に見られる「家畜」を通して、毛利先生のイメージがどのようなものであったかを考えたい。毛利先生の授業中における翻訳は次のようなものであったことが直接話法で示されている。

「そこでロビンソン・クルーソーは、とうとう飼ふ事にしました。何を飼ふ事にしたかと云へば、それ、あの妙な獣で——動物園に沢山ある——何と云ひましたかね、——ええと、よく芝居をやる——ね、諸君も知つてゐるでせう。それ、顔の赤い——何、猿？ うううう、その猿です。その猿を飼ふ事にしました。」

「猿」という単語を思い出すのにもここまで手間取ってしまう語彙力の無さ、あるいは日本語を「知つてゐても、その場に臨んでは急には思ひ出せない」ありさまについては、いくつかの解釈が示されている。たとえば山本芳明は「英語教師としての実力がなかったからである」と解釈し、三好行雄は「毛利先生がぶざまな失語症状に悩みながら」と「失語症」の可能性を、また寫田明子は「咄嗟に言葉が出てこないという〈老い〉の問題とも捉えられ、英語力そのものの問題とは言いきれないのである」と「老い」の可能性を示唆している。はたして毛利先生の日本語の語彙力の乏しさは病や老いのせいなのか、その原因を特定する根拠は作品内に示されていないが、いずれにしてもこの場面は滑稽な印象を与えるとともに毛利先生を「ロビンソン・クルウソー」に登場する「猿」という「家畜」のイメージに強く結びつけるものになっている。次はロビンソン・クルーソーが動物を飼う場面である。

また船では犬を一匹、猫を二匹飼つていたことも忘れてはならない。(中略) 犬も十六年にわたつて私の愉快な愛すべき仲間だったが、ついに老衰で死んだ。猫のほうは、前にも言ったが殖えに殖えて、私の持つていたものはおろかこの私さえ食いかねない勢いだったので、仕方なく最初のうちは何匹か撃ち殺した。

このように、ロビンソン・クルーソーは「犬」「猫」「オウム」などを飼うが、「猿」を飼う場面はどこにもない。松本常彦もこのことに関して「ロビンソン・クルウソー」で猿を飼う場面が描かれていることなども芥川の創作」と指摘している。確かに「チョイス・リイダ」に載っている「ロビンソン・クルウソー」の内容は、その小タイトルが「Robinson Crusoe's Shipwreck (ロビンソン・クルー

ソ一の難破船——^(注17)「賈訳」であることから分かるように、ロビンソン・クルーソーが難破した時のことが主に掲載されているため、そもそも動物を飼う話自体が載っていない。

ただし、ロビンソン・クルーソーが猿を飼うというのは、芥川の創作ではなく、単なる思い込みだったという可能性もある。芥川が一九二七年に発表した「三つのなぜ」には次のように書かれている。なぜロビンソンは猿を飼ったか？ それは彼の目のあたりに彼のカリカチュアを見たかつたからである。わたしはよく承知してゐる。銃を抱いたロビンソンはぼろぼろのスボンの膝をかかへながら、いつも猿を眺めてはもの凄いの微笑を浮かべてゐた。鉛色の顔をしかめたまま、憂鬱に空を見上げた猿を。^(注18)

この文章はロビンソン・クルーソーが猿を飼っていたことを前提にして書かれており、この点からも芥川が「ロビンソン・クルーソー」に猿が登場すると思ひ込んでいた可能性も指摘できる。「三つのなぜ」の記述の前提までも芥川の創作と考えることもできるが、はたしてロビンソン・クルーソーが猿を飼っていたというのが芥川の創作なのか思い込みなのかは断定できない。いずれにしても、この「三つのなぜ」からも、芥川が猿を用いて人間を戯画化していることが分かる。

また、芥川の他作品の中でも度々みられる「猿」の描き方からも、芥川が猿を戯画的存在として使うことがあったことが読み取れる。例えば「動物園」には猿に関してこのような記述がある。

猿よ。お前は一体泣いてゐるのか、それとも亦笑つてゐるのか。お前の顔は悲劇の面のやうで、同時に又喜劇の面のやうだ（中略）お前は一体泣いてゐるのか。それとも亦笑つてゐるのか。

猿よ。人間よりもより人間的な猿よ。おれはお前程巧妙なトラザック・コメディアンを見た事はない。——おれが心の中でかう呟くと、猿は突然身を躍らせて、おれの前の金網にぶら下りながら、痾高声で問い返した。「ではお前は？ え、お前のそのしかめ面は？」^(注19)

毛利先生と再会を果たした自分②は、「利那の間こんな事を考へた自分は、泣いて好いか笑つて好いか、わからないやうな感動に圧せられながら」毛利先生を見ていた。その人物像は偶然にも引用文にもあるように、「一体泣いてゐるのか。それとも亦笑つてゐるのか」わからないというトラザック・コメディアン、つまり悲劇的なコメディアンのような猿を見ながら「お前のそのしかめ面は？」と問い返されたような印象を受ける「動物園」の場面と重なる。

このように自分②は、毛利先生の見た目を「蜘蛛男」、「駝鳥の卵」、「翼をひろげた蛾」のようであると形容することで、毛利先生を動物のイメージに結びつけ、さらに「家畜のやうな眼」という比喻を反復しつつ「ロビンソン・クルーソー」というサブテキストを用いて毛利先生の姿を飼われた「猿」と重ねることによって、毛利先生の外見や立ち振る舞いを通して「家畜」のイメージを読者に印象づけているのである。

四 「毛利先生」と「サラム・オヴ・ライフ」

このように「毛利先生」と「ロビンソン・クルーソー」を合わせ読むと、毛利先生は自分②によって人間に劣る「家畜」のイメージに結びつけられながら戯画的に語られていることが分かるが、続い

て引用される「サアム・オブ・ライフ」に注目すると、毛利先生の別の側面が浮かび上がる。毛利先生は授業中にロングフェローの詩「サアム・オブ・ライフ」にちなんで「生活難」について次のように語る。

毛利先生は、急に椅子から身を起すと、丁度今教へてゐるロングフェローの詩にちなんで、人生と云ふ問題を弁じ出した。趣旨はどんな事だつたか、更に記憶に残つてゐないが、恐らくは議論と云ふよりも、先生の生活を中心とした感想めいたものだったかと思ふ。と云ふのは先生が、まるで羽根を抜かれた鳥のやうに、絶えず両手を上げ下げしながら、慌ただしい調子で饒舌つた中に、「諸君にはまだ人生はわからない。ね。わかりたいつたつて、わかりはしません。それだけ諸君は幸運なんでせう。我々になると、ちゃんと人生がわかる。わかるが苦しい事が多いです。ね。苦しい事が多い。これで私にしても、子供が二人ある。それ、そこで学校へ上げなければならぬ。上げれば、——ええと——上げれば——学資？さうだ。その学資が入るでせう。ね。だから中々苦しい事が多い……」と云うような文句のあつた事を、かすかに覚えてゐるからである。

自分②の目には「生活難」について語る毛利先生が「羽根を抜かれた鳥」のように（これもまた「家畜」のイメージに結びつく比喩である）慌ただしいものに映つてゐる。さらに自分②はこの後、「僕たちは英語を教へて頂く為に、出席してゐます。ですからそれが教へて頂けなければ、教室へはいつてゐる必要はありません」と「柔道の選手」から責められ、謝罪する毛利先生の姿を見て次のように考へる。

この気の毒な光景も、当時の自分には徒に、先生の下等な教師根性を暴露したものとしか思はれなかつた。毛利先生は生徒の御機嫌をとつてまでも、失職の危険を避けようとしてゐる。だから先生が教師をしてゐるのは、生活の為に余儀なくされたので、何も教育そのものに興味があるからではない。

毛利先生が授業中に生徒に頭を下げるという「事件」によつて、毛利先生は英語を教えることに興味はないが、生活のために仕方なく教師をしているだけの人物であると、自分②に印象付けられてしまう。

しかし、実際のチョイス・リイダアには、ロングフェローの詩「サアム・オブ・ライフ」の全文が掲載されており、全文を見ると、毛利先生が生徒に訴えようとしていたことは単なる「生活難」だけではなかつた可能性が浮かび上がる。この詩からの引用は小説中に「Life is real, life is earnest」（人生は現実、人生は厳粛^{注30}）という一文だけであるが、もとの詩ではその三連後に次のような言葉が続いてゐる。

In the world's broad field of battle, In the bivouac of life, Be not like dumb, driven cattle! Be a hero in the strife!

この世の広い戦場で、人生の野営地で、黙つて追い立てられていく家畜であるな！ 断乎戦う勇士であれ！

毛利先生が教えていた「サアム・オブ・ライフ」は、「人生で戦う勇士」であれと激励する詩で、むしろ「家畜」とは対照的なものであることがわかる。また、詩の内容だけでなく、授業に対する毛利先生の態度に注目してみると、「休憩時間の喇叭が鳴り渡るまで、勇敢に訳説を続けて行つた」、「それから休憩時間の喇叭が鳴るまで、我

毛利先生は何時もより更にしどろもどろになつて、憐む可きロングフエロオを無二無三に訳読しようとした」とある。自分②たちに嘲笑されても毛利先生は授業を投げ出すことなく、「休憩時間の喇叭」が鳴るまで「勇敢」に「無二無三」に訳読を続けたのである。「サム・オブ・ライフ」には一度しか出てこない「Life is real life is earnest」を小説では繰り返すことによって、この言葉を「必死になつて叫びつゝける」毛利先生の姿が自分②の印象に深く刻まれていることを示しているが、もとの詩は、決してただ人生は「苦しいことが多い」ということを訴えただけのものではなく、「人生は現実、人生は厳粛」には違いないが、それに「黙つて追い立てられていく家畜であるな！ 断乎戦う勇士であれ！」という主張がこのあとが続いていたのである。

毛利先生の「御話」も「柔道の選手」に責められたことによって、途中で遮られてしまつたが、それがなければ単に「生活難」を訴えるだけのものにはなつていなかった可能性がある。しかし、自分②を含めて中学校の生徒たちはそのことに理解が及ばない。自分②が毛利先生の別の側面に気づくのは、それから「七八年」後、偶然カフェで毛利先生に再会した時である。

五 「毛利先生」と「ドンキホテ」

「大学を卒業した年」の「十二月の初旬近く」、自分②は偶然立ち寄った「カツフエ」で、毛利先生が「給仕たちに英語を教へてゐるらしい」ところを見る。そして、それまでは「生活の為に余儀なく」自分②たちに英語を教へ、「失職の危険を避け」るためには中

学生に頭を下げることも辞さない「下等な教師根性」を持つ「腰弁生活者」として、また滑稽な人間以下の「猿」や「家畜」として描かれていた毛利先生の評価を、自分②は劇的に改めるにいたる。

あ、毛利先生。今こそ自分は先生を——先生の健気な人格を初めて髣髴し得たやうな心もちがする。もし生まれながらの教育家と云ふものがあるとしたら、先生は実にそれであらう。（中略）まして昔、自分たちが、先生の誠意を疑つて、生活の為に嘲つたのも、今となつては心から赤面の外はない誤謬であつた。思へばこの暇つぶしと云ひ生活の為に云ふ、世間の俗悪な解釈の為に、我毛利先生はどんなにか苦しんだ事であらう。元よりさう云ふ苦しみの中にも、先生は絶えず悠然たる態度を示しながら、あの紫の襟飾とあの山高帽とに身を固めて、ドンキホテよりも勇ましく、不退転の訳読を続けて行つた。

毛利先生に対する印象を改めてからの自分②の毛利先生への評価は不退転の「ドン・キホーテ」、つまり「戦う勇士」へと変化している。以前と変わらぬ「紫の襟飾」と「山高帽」も「勇士」が「身を固め」るための武器のイメージを帯びるようになっていく。これらはかつて「侮辱」と嘲笑の種でしかないものであつた。

或はその毛利先生に対する侮辱は、丹波先生の「あの帽子が古物だぜ」によつて、一層然る可き裏書きを施されたやうな、づう／＼しさを加へてゐたとも考へる事が出来るであらう。（中略）その山高帽子とその紫の襟飾と——自分は当時、寧ろ晒（わ）ふ可き対象として、一瞥の中に収めたこの光景が、何故か今になつて見ると、どうしても又忘れる事が出来ない。……

毛利先生のイメージが「腰弁」、「家畜」から「勇士」に変わることに

よって、毛利先生が身にまとっていた滑稽だった「襟飾」「山高帽」も戦うための武具のイメージへと変化したと考えられる。

それでは、自分②が考える毛利先生の「健気な人格」とは、どのようなものだったのだろうか。中野重治は「毛利先生」を、「彼の数ある短編のなかでも特に傑作といつたものではない」と評価しながら次のように語っている。

しかし先生にはひとつのものがあつた。教えたいという心、英語に関する自分の知識をたえず誰かにわかちたいという心がある。「もし生まれながらの教育家と云ふものがあるとしたら、先生は実にそれであらう。」いづぞや先生は、西東もわからぬ中学生相手に生活難を訴えた。あれさえ、先生が、知らずに相手を対等のものに扱つてしまつて、その本質的な無邪気な性質をあらわしてゐたのだらう。

確かに、毛利先生の「教えたいという心」の強さは、授業料を払えない給仕たちにも熱心に指導していることから窺^{うかが}える。しかし、自分②はただ教える相手への「対等」さや先生の「本質的な無邪気」さだけを見て毛利先生を「健気な人格」を持つ「生まれながらの教育家」と評しているのだろうか。これを考えるには、なぜ自分②が毛利先生を「ドンキホオテ」に喩えているのかを検討する必要がある。芥川は評論「大正八年度の文芸界」に次のように記している。

では此処二三年の傾向とは何かと云へば——予は便宜上、その前にもう一時代前を振返つて、自然主義以来の文壇の大勢へ、ざつと眼を通して置きたいと思ふ。自然主義がその文芸上の理想を「真」の一字に置いた事は、云ふまでもない事実であらう。当時批評の高かつた長谷川天溪氏の評論「現実暴露の悲哀」の

如きは、雄弁にこの事実を証明するものである。^(注32)

これを読むと、芥川龍之介は「毛利先生」の執筆と重なる時期に長谷川天溪の「現実暴露の悲哀」を読み、肯定的に評価していたことがわかる。その長谷川天溪「現実暴露の悲哀」にはドン・キホーテについて次のように書かれている。

ドンキホオテは全然此の眼前の現実を顧ざる人物なり。否、其の能力なき奇物なり。彼れの眼に映じたる現実とは、悉く騎士道を標準として幻像化せらる。(中略)秒時と雖も現実世界に還らず、幻化の世界をのみ眺めたる彼れの一生は、奮闘の歴史なり。現実を回顧して逡巡躊躇するハムレットに比すれば、ドンキホオテは、正反対なる実行家なり、活動家なり。彼れの思想と行為との間には一厘の隔隙もなく、思想即ち意志なり活動なり。彼れは悪と見れば直に之を除かむとし、毫も自己の不利を顧慮せず。げに水車と喧嘩するが如きはドンキホオテならでは能はざる所なり。而して彼れは多くの場合に於いて失敗せり。愛すべき騎士は幾たびか傷を蒙り、侮辱せられ、狂人視せられき。去れど蒙も恨む所なく、自分の修業未然なるを責むるは彼れなり。予はツルゲネフが語を藉りて彼れを紹介せむ。(中略)ハムレットは同情すべき人物なり、ドンキホオテは尊敬すべき人物なり。^(注33)

長谷川天溪のドン・キホーテ観は、「眼前の現実」や「自己の利益」を顧みず、「多く」の「失敗」や「侮辱」にさらされながらも「奮闘」しつづける「実行家」であり、「思想と行為との間には一厘の隔隙もな」い「愛すべき騎士」であるというものである。このドン・キホーテ観に芥川も影響を受けたことが推測できる。

自分②が再会した毛利先生を「健気」と言い、「生まれながらの教師」と言うのは、教師という職務を「生活の為に余儀なく」しているというその「下等な教師根性」を批判していた中学時代とは対照的である。自分②たち中学生だけでなく、制度上は教えずではない給仕たちにも熱心に英語を教えていたことから、毛利先生がどのよう³⁴に現実、つまり子供二人の学資負担などによる「生活難」やかつての自分②たちからの嘲笑に代表されるような「世間の俗悪な解釈」に向き合ってきたのか、その態度が想像できる。それは冒頭部分の自分①が想起した「並木」の相川が「社会の為に尽くさう」といふ熱い烈しい希望を抱いて「いたように、毛利先生も英語教育に「希望」を持つてきたこと、そして英語を教え続けることによって現実と闘って臨んできたということである。自分②が毛利先生を現実³⁵に追われ何一つできない人物だと思い込んでいたという「誤謬」に気づき、「健気な人格」を持つ「生まれながらの教育家」と評するようになったのは、毛利先生こそ現実と闘い、「希望」の実現に向けて活動する実行者だったことに気づいたからだだったのである。

六 「毛利先生」と「ナポレオン」

ただし、毛利先生とドン・キホーテのイメージは完全に一致しているわけではない。毛利先生は「ドンキホーテよりも勇まし」と語られているのである。このことの意味を考えるために結末部分で繰り返されるナポレオンと毛利先生とのイメージの重なりについて考えたい。自分②は毛利先生に偶然再会した時、先生が英語の関係代名詞について説明するためにナポレオンという名を繰り返してい

る姿を目にする。

そら、こゝにある形容詞がこの名詞を支配する。ね。ナポレオンと云ふのは人の名前だから、そこでこれを名詞と云ふ。よろしいかね。(中略)

「何、関係代名詞？ 関係代名詞と云ふものはない。関係——え、と——関係代名詞？ さうさう、関係代名詞だね。代名詞だから、そら、ナポレオンと云ふ名詞の代りとなる。ね。代名詞とは名に代る詞と書くだらう。」

松本常彦は「ナポレオン」は欧州戦争下に立身出世を夢みる少年たち(中略)に教えているという状況と関わる³⁶と指摘しているが、確かに「ナポレオン」は一般的に「英雄」や「立身出世」のイメージを持つており、ここでは立身出世を目指す給仕たちに結びつけられているとも考えられる。その一方で、松本は「ナポレオン」が「関係代名詞」になるのは「J.T. Headley “The Burning of Moscow.” (「チョイス・リイダア」第五卷)であるとも指摘しているが、それは次のようなものである。

At length Moscow, with its domes, towers, and palaces, appeared in sight; and Napoleon, who had joined the advance guard, gazed long and thoughtfully at that goal of his wishes.³⁷モスクワのドーム、タワー、宮廷が端から端までが見えた。前衛部隊に加わったナポレオンは、その先に望む目標を見つめながら長く考え込んだ。(曹訳)

本文中には毛利先生が給仕たちに英語を教えるときにも「チョイス・リイダア」を使用しているとは明記されていないが、松本の指摘する通り、毛利先生が「ナポレオン」のすぐ後にある「関係代名詞」

について給仕たちに教えているという一致から、ここでも「チョイス・リイダア」を使用していたと仮定して解釈することができる。その内容を見ると「モスクワ」を攻撃しようとしていることからナポレオンの全盛期の姿ではなく、失敗に終わったロシア遠征について書いたものであることがわかる。

ちなみに「中央公論」の記者であった諏訪三郎の証言によれば、「毛利先生」の成立時、芥川が勤めていた海軍機関学校での英語授業は次のようなものであった。

当時の機関学校の教材は、英文を印刷にしたものを用いており、その内容はことごとく勝利を謳歌する軍国主義的なものばかりで、英語を教えながら、生徒の士気を鼓舞激励するねらいであったが、芥川教官は新任忽々それを一掃して、教材に用いるものは、すべてが敗戦の物語であり、衰亡の歴史であった。

芥川が英語を教えていた時に使っていた教材に「敗戦の物語」が多かった点を踏まえると、「毛利先生」に描かれる「ナポレオン」もその全盛期ではなく、敗北間近の姿がえて選ばれていると考えることもできる。

ここに見られるナポレオン像は、一般的な立身出世のイメージというよりは敗戦間際の人物、つまり悲劇的な勇士として描かれていると言えるのである。この悲劇性にこそナポレオンとドン・キホーテとの違いが認められるだろう。長谷川天溪が言う通り、ドン・キホーテは「実行家」であり「愛すべき騎士」ではあるが、「眼前の現実を顧ざる人物」であり「秒時と雖も現実世界に還ら」ざる人物でもある。一方、ナポレオンはまぎれもなく「眼前の現実」に対峙している。ナポレオンの敗因は、ロシア遠征で遭遇したロシアの厳し

い冬の寒さであることで知られている。冬はナポレオンにとつての厳しい現実を象徴するものと言えよう。これは「毛利先生」の冒頭部分の「歳晩の或暮方」のイメージにも重なる。冒頭部分において自分①と「外套の肩をすり合わせるやうにして、心もち足を早めながら」歩く自分②が「電車を待つてゐる人々の寒さうな姿を一瞥すると、急に身ぶるひを一つして」毛利先生のことを語り始めるという形で冬の寒さが強調されている。そして自分①が「並木」の「もつと頭を挙げて歩け」という言葉を想起することによって、「毛利先生」における冬の寒さは現実の厳しさを象徴するものになっているのである。人々が冬の寒さに凍える中で自分②が「毛利先生のことを思ひ出す」のは、「あの紫の襟飾とあの山高帽とに身を固め」ているという毛利先生の変わらぬ姿が、単にドン・キホーテのように「不転転」のものであったからだけではなく、敗戦間際のナポレオンのように厳しい現実に対峙するものだからである。毛利先生が「ドンキホオテよりも勇ましく」と語られるのは闘いを挑む相手がドン・キホーテのように「幻化の世界」ではなかったからなのである。

七 結論

このように小説「毛利先生」は、冒頭で自分①に島崎藤村「並木」を引用させて「もつと頭をあげて歩け」つまりただの「腰弁生活者になるな」というメッセージを掲げた上で、自分②の回想の序盤にはデフォーの「ロビンソン・クルウソー」を引用して「家畜」のイメージを毛利先生に重ね、中盤にはロングフェリオ「サアム・オヴ・ライフ」を引用して「家畜」と「勇士」の二項対立を暗示し、終盤

にはセルバンテス「ドンキホオテ」と「ナポレオン」を言及して「勇士」、さらには悲劇的な「勇士」のイメージを毛利先生に重ねることによって、「家畜」から「勇士」へという毛利先生像の劇的な変化を読者に印象づけているのである。

これらは「毛利先生」とサブテキストを合わせて読んだときにはじめて読者の中で統合されるものである。この小説はそれだけ読者に能動的な読書行為を促すテキストであると言える。このことは「毛利先生」の語り手が、芥川自身を連想させる自分①と「友人の批評家」である自分②に分けられていることにも関係する。「並木」を引用しながら「もつと頭をあげて歩け」とメッセージを発する自分①と、さらにさまざまなサブテキストに言及しながら毛利先生像の「家畜」から「勇士」への変貌を語る自分②は、相補的な関係にあるといえる。つまり、メッセージの内容としては大きく重なりながら、形式としてはあえて分けられており、読者の中ではじめて統合されるように書かれているのである。それは「並木」や「家畜」になるなどという受動的であることを批判するメッセージを、ただ内容としてだけでなく形式としても読者に届けるという作用を持っている。すなわち「毛利先生」は、語り手を二人に分け、さまざまなサブテキストを合わせて読むことを促すことによって、内容・形式ともに能動性を志向する小説になっているのである。

三好行雄は「羅生門」の語り手と作品世界との距離に注目して「龍之介のこうした方法はやがて文字どおりの語り手の設定——〈友人から聞いた話〉だとか〈蔵書に見える逸話〉、〈他人の手記〉といったふうな擬態をとる場合も多い——にまで進むわけだが、書き手としての〈私〉と作品の世界の直接的な関係を絶とうとする意図」とし

て、語り手が物語内容から距離を取るものの延長として語り手が二人に分けられていることを意味づけている。しかし「毛利先生」においては、自分②が毛利先生に対して反感から共感へ、また軽蔑から尊敬へとその印象を変化させていく過程が描かれている。そもそも自分②はなぜ自分①に毛利先生の話をしたのだろうか。冒頭部分をもう一度振り返ってみると、「自分たち」は「昔、島崎藤村が「もつと頭をあげて歩け」と慷慨した、下級官吏らしい人々が、まだ漂っている黄昏の光の中に、蹣跚たる歩みを運んで行く」のを見て、「憂鬱な心もちを、払いのけようとしても払いのけられなかった」という状況で自分②は自分①に「毛利先生の事」を語りはじめたのであった。自分②にとつて毛利先生とはたとえ現実が厳粛なものであっても、それに従う「家畜」ではなく、それと闘う「勇士」でありつづける生き方があることを身をもって示してくれた存在であった。自分②が自分①に「毛利先生の事」を話した背後には、相手を慰め、励まそうとする思いが見受けられるのである。さらに先述の通り「神田」という場所、「並樹の柳」という情景、そして「歳晩」と「十二月」という時間の重なりによって「毛利先生」という作品には円環的な構造が作り出されているが、この円環的構造は、冒頭部分の「まだ君には話した事がなかったかな」という自分②が自分①にかける言葉からも窺えるように何度も毛利先生を思い出すという回帰を示すことによって自分②の毛利先生に対する共感の深さを強調しつつ、それを「自分に話してくれた」こととして読者に「掲げる」自分①の共感の深さを暗示するものと考えられる。つまり毛利先生への共感とそれを誰かに伝えようとする行為によって自分②と自分①は結ばれている。自分②の回想部分における毛利先生への反感から共

感へという構成が、さらに小説の結末と冒頭の円環的な構造によって、毛利先生への共感の広がりとその強度の高さが示されている。そしてさらにならなっていた自分①と自分②、自分②と毛利先生を結びつけるために機能しているのがサブテキストなのである。

毛利先生の「生き方」への共感を芥川の伝記的事実と合わせて解釈することもできる。芥川は「毛利先生」を発表した一九一九年に、「英語教官」をやめ、「専業作家」となるのである。この小説のメッセージは、この小説が読者に語ったものであると同時に、芥川が自身に語ったものであると見ることもできる。今後の課題は、芥川龍之介の他の作品と「毛利先生」との関係を探るために、毛利先生に似た人物を描いた作品として並べて論じられることがある「父」〔新思潮〕一九一六年五月、「芋粥」〔新小説〕一九一六年九月、「猿」〔新思潮〕一九一六年九月などとの比較を行い、さらに芥川が「毛利先生」を発表した時期（一九一九年一月）に横須賀の海軍機関学校で英語教師をしていたこと（一九一六年二月―一九一九年三月）なども合わせて考察することによって、「毛利先生」の特質を多角的に追究することである。

注

- (1) 芥川龍之介『傀儡師』（新潮社、大正八年一月）。本文の引用は『芥川龍之介全集 第四卷』（岩波書店、一九九六年二月）による。
- (2) 和辻哲郎「電車の中で（下）」〔読売新聞〕一九一九年九月九日。
- (3) 宮島新三郎「新年文壇の印象」〔八〕〔国民新聞〕一九一九年一月一六日。

- (4) 中野重治「人生の辛さ、はじめとした苦しさ——芥川龍之介の『毛利先生』」〔国分一太郎他編『文学のなかの教師』明治図書、一九五七年九月。
- (5) 吉田精一『芥川龍之介』（新潮社、一九五八年一月一五日）。
- (6) 石割透『芥川』とよばれた藝術家——中期作品の世界（有精堂、一九九二年八月）。
- (7) 山本芳明「大正八年の芥川龍之介」〔文学者はつくられる』ひつじ書房、二〇〇〇年二月）。
- (8) 田村修一「時代に取り残されて 芥川龍之介『毛利先生』」（上田博、池田功、前芝憲一編『小説の中の先生』（おうふう、二〇〇〇年八月）。
- (9) 宮園美佳「芥川龍之介」小論——「学生」の同伴者毛利先生——〔常磐会学園大学、二〇一五年三月）。
- (10) 水洞幸夫「『毛利先生』試論——〈歩く〉この方法化——」（金沢学院大学文学部紀要、一九九八年三月）。
- (11) 寫田明子「芥川龍之介『毛利先生』論——批評をめぐって」（芥川龍之介研究年誌、二〇〇八年三月）。
- (12) 島崎藤村「並木」〔文藝倶楽部、一九〇七年六月）。引用は『藤村全集第三卷』（筑摩書房、一九六七年一月）による。
- (13) ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』（鈴木建三訳、集英社、一九九九年六月）。
- (14) ロングフェロー「人生賛歌」の翻訳は外山正一などが有名だが、本論では亀井俊介訳（『アメリカ名詩選』岩波書店、一九九三年三月）による。
- (15) セルバンテス『ドン・キホーテ』（牛島信明訳、岩波書店、二〇〇一

年一月)。

- (16) 松本常彦「注釈」(『芥川龍之介全集第四卷』岩波書店、一九九六年二月)。

- (17) 藤村の「並木」は、本文に登場する「相川」のモデルになった馬場孤蝶の、モデルの扱い方に対する批判と、同じく「原」のモデルになった戸川秋骨の、「並木」の続編「金魚」の掲載により、文壇にいわゆる「モデル問題」、つまり小説家が他者を借りて虚構を付着することによる文学者の道徳的責任の問題を引き起こした小説である。

- (18) 石割透「毛利先生」——大正期文学に見る教師像の一面——「(駒澤短期大学研究紀要)一九九一年三月」。

- (19) 寫田明子「芥川龍之介「毛利先生」論——批評をめぐって」(前掲)。
- (20) 前田晃「新春劈頭の月評(六)」(『時事新報』一九一九年一月二三日)。

- (21) 石割透「芥川」とよばれた藝術家——中期作品の世界」(前掲)。

- (22) 山本芳明「大正八年の芥川龍之介」(『文学者はつくられる』(前掲)。

- (23) 三好行雄「芥川龍之介論」(筑摩書房、一九七六年九月)。

- (24) 寫田明子「芥川龍之介「毛利先生」論——批評をめぐって」(前掲)。

- (25) ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』(前掲)。

- (26) 松本常彦「注釈」(前掲)。

- (27) J.T.Wright校訂『スタンダードチョイスリーダーズ、NO.5』(鍾美堂、一九〇二年二月)。

- (28) 芥川龍之介「サンデー毎日」(一九二七年四月)。

- (29) 芥川龍之介「夜来の花」(新思潮、一九二二年三月)。

- (30) ロングフェロー「人生賛歌」(前掲)。

- (31) 中野重治『文学のなかの教師』(前掲)。

- (32) 芥川龍之介「大正八年度の文芸界」(大阪毎日・東京日日新聞社編『毎日年鑑(大正九年、一九二〇年版)』一九一九(大正八)・十二月)。

- (33) 長谷川天溪「現実暴露の悲哀」(『太陽』一九〇八年一月)。なお、芥川龍之介のドン・キホーテ観と長谷川天溪との関わりについては、松本常彦「注解」(前掲)からも示唆を受けている。

- (34) 松本常彦「注解」(前掲)。

- (35) ジュー・テイー・スウキフト校訂『スタンダードチョイスリーダーズ、NO.5』(鍾美堂、一九〇三年)。

- (36) 諏訪三郎『敗戦教官、芥川龍之介』(中央公論、一九五三年三月)。

- (37) 三好行雄「無明の闇——「羅生門」の世界」(『国語と国文学』、一九七五年四月)。